
紀 要

森成麟造と上越考古学会

今井 晃

はじめに

森成麟造は、明治時代末から戦後にかけて旧高田市の本町2丁目で開業していた内科医であり、医業の傍らで考古学研究をはじめとした数多くの文化活動をけん引した人物である。平成2年（1990）、森成のご遺族から1,379点に及ぶ考古資料が「森成麟造考古資料コレクション」（以降、「森成コレクション」と略）として当時の上越市立総合博物館に寄贈され、総合博物館や上越市埋蔵文化財センターなどでコレクション展を開催してきた。

令和4年度夏には当館にて企画展「森成麟造—上越考古学の先覚者—」を開催した。本企画展では、森成家のご協力のもと、これまでの「森成コレクション展」ではあまり触れられなかった、森成麟造の生涯・業績について、より深く紹介することができたことが大きな成果と考えている。今回森成家から借用、調査させていただいた資料は、森成麟造個人としての業績録であると同時に、上越地域の考古学研究のあゆみを明らかにしうるものでもある。本稿では、森成が会長を務め、大正末から昭和初期にかけて活動した「上越考古学会」について、森成家所蔵資料から考察していく。

1 森成麟造について

本題に入る前に、森成麟造の経歴について、ここで簡単に述べておく。

森成は明治17年（1884）に東頸城郡菱里村真荻平（現在の上越市安塚区真荻平）に生まれ、明治31年（1898）に中頸城郡立中頸城中学校（在学中に県立高田中学校に改称、現在の県立高田高等学校）に入学した。同35年（1902）に卒業後、仙台医学専門学校（現在の東北大学医学部）を経て、同39年（1906）に東京の長与胃腸病院で内科医として勤めはじめた。

同43年（1910）、夏目漱石が持病の胃潰瘍の治療のため、森成が勤めていた長与胃腸病院に入院する。同年夏の「修善寺の大患」を経て、漱石とその家族、門下生たちとの交流を持つこととなった。

翌44年（1911）春、郷里である上越に戻ることとなり、高田市横町（現在の上越市本町2丁目）で「森成胃腸病医院」を開業した。開業後、昭和30年（1955）に71歳で亡くなるまでの間、俳句、音楽、写真などの文化活動に熱心に取り組み、それぞれの会の会長や役員などを担って当地域の文化活動の発展に尽力した。また、地元の学校の後援会やPTAでも会長を務めるなど、多方面で活躍した。

森成の「趣味」のうち、最も関心が高かったのが「考古学」である。森成は高田中学校在籍時、博物学担当の吉川純三郎教諭に影響を受け、市内の滝寺（茶新田遺跡）などで遺物採

集を始めたという。当館に寄贈された「森成コレクション」は、石鏃や土器片など、上越市内外から集められた出土品などからなり、これらの資料は台紙の上に絹糸で縫い付け、桐箱に入れて保管されている。また、台紙の裏には、それぞれの資料がいつ、どこで採集されたかといった情報が、可能な限り記録されていることが特筆される。

なお、こうした台紙の裏書きをはじめ、今回の企画展にあたって調査できた限りでは、森成は仙台や東京、そして高田に戻ってきてからしばらくの間は、目立った考古学的な活動をしていなかったようである。活動開始は、大正年間の終わりごろに創立した本稿の主題である「上越考古学会」が、ひとつの端緒であったと考えられる。

2 「上越考古学会」にかかわる先行研究

これまでに知られている「上越考古学会」の動向については、「初代会長は相馬御風（大正14年〔1925〕）」「3年目から森成が会長」「森成が撮った写真に斎藤秀平¹が解説文をつけ、会員に配布していた」「昭和7年（1932）に斎藤秀平が小千谷高等女学校へ転任したことで、会は自然消滅した」などである。これらの情報は、昭和30年（1955）刊行の『頸城文化』第8号に所収された「森成先生の思い出を語る座談会」（以下「座談会」と略）の記事が基になっており、『高田市史』第3巻や『上越市史』（資料編2 考古）などで紹介されてきた。

関雅之氏は「新潟県考古学研究の歩み」（新潟県考古学会〔編〕『新潟県の考古学』（高志書院、1999年））をはじめ、新潟県内の考古学史にかかる論文などをいくつか発表している。特に「上越考古学会」に関しては、『高田新聞』や喜田貞吉²による「東北文化研究」の記事なども悉皆的に調査し、「高田新聞からみた上越地方の考古学」（新潟県考古学会〔編〕『新潟考古』第10号所収、1999年）や、「上越考古学会と初代会長の相馬御風」（上越郷土研究会〔編〕『頸城文化』第55号所収、2007年）に詳しくまとめ、考察されている。一方関氏は、会員による直接的な記録が公開されていないことを課題としても挙げており、今後の研究の進展のためには森成ら中心メンバーによる記録の発見が必要であるとも述べているが、以降、「上越考古学会」に関する新資料の紹介や論文などは新出されていなかった。こうしたなかで今回、森成麟造本人による記録を実見する機会を得たことから、本稿でその内容を紹介し、またこれまで明らかになっていたことの再検討をしていく。

3 「上越考古学会」の創立

これまで「上越考古学会」の動向がわかる資料は、当時の新聞を除けば「座談会」の記事などのみであり、情報は限られていた。本章では、会の創立の趣旨や目的などについて明ら

¹ 大正14年に地理科教員として高田師範学校に赴任。以降、森成らとともに上越考古学会の中心メンバーとして活動。その後小千谷高等女学校長、新潟郷土博物館長を歴任した。

² 森成と関係の深かった考古学者。東北帝国大学国史学研究室に在職中、森成宅を度々訪れている。

かにしうる「上越考古学会日誌」（以下、「日誌」と略す）を紹介する。

「日誌」は、ノートの切り抜き5枚（書き込みは両面で10ページ）にわたって、会の創立から約1年間の動向を記録している。筆跡を「森成コレクション」の裏書の文字などと比較すると、森成本人の直筆と思われる。ただし、途中から日付が空欄になっていたりすることから、この「日誌」は、日々書き綴っていたものというよりは、後日まとめて書いた可能性が高い。

内容は以下のとおり。

【資料1】

上越考古学会日誌

創立

大正十五年度

七月二十三日、喜田貞吉博士来高

森成宅ニ一泊セラレ斐太村及菅原村ヲ視察セラル

其際、斎藤秀平、岩澤良作、森成麟造三名ニテ考古学的智識ノ向上ヲ計ル為メニ時々
会合センコトヲ約セリ

八月二十七日、午後七時、南土橋町斎藤氏宅ニ岩澤、森成、斎藤会合シ偶々考古学会創
立ニ及ビ乃チ規則（仮）ヲ制定シ岩澤氏ニ謄写ヲ依頼ス

九月七日、規則書百二十枚出来上ル

九月九日、相馬昌治氏ヨリ仮会長就任承諾ノ旨申来ル

十月十日、午後八時斎藤氏宅ニ森成訪問シ考古学会ノ主意書并勧誘状謄写を依頼ス

十月十五日、勧誘書百二十枚出来上ル

十月二十五日、午前八時 森成宅ニ斎藤岩澤森成三名会合シテ各方面ニ勧誘状ヲ發送
ス即チ次ノ如シ

勧誘状

私共儀今回同志相寄り上越考古学会ヲ發起シ我上越ニ於ける古代文化ノ跡を研究致
す事になりました。就いては貴下に於かれても斯道に御熱心御研究の内兼ねく承りあ
る事であらますれば何此際御入会下さいます様我々の深く希望する處で御座います

大正十五年十月

相馬御風

森成麟造

岩澤良作

斎藤秀平

規則書

会則

第一條 本会ハ上越考古学会ト称ス

第二条 本会ハ同志相集リ遺物遺蹟ニ依リ上越古代文化ヲ明カニスルヲ目的トス

第三条 本会ハ会員ノ互選ニ依リ左ノ役員ヲ置キ其任期ハ満二ヶ年トス

会長 一名

副会長 一名

幹事 若干名

第四条 本会ハ年四回例会ヲ開ク但シ臨時開会スルコトアルベシ

第五条 会員ハ会費トシテ年額金壹円ヲ前納スベシ

第六条 本会ニ入会セントスルハ会員ノ紹介ヲ以テ宿所、姓名ヲ明記シ事務所ニ申込ムベシ

第七条 本会事務所ハ当分高田市横町拾四番地森成方ニ置ク

趣意書³

勧誘状発送名ハ次ノ如シ

○ハ申込者⁴

役員 仮役員

十一月二十三日 発起人齋藤岩澤森成三名会合シ事務ノ整理進行上、次ノ仮役員ヲ定メタリ

会長 齋藤 相馬昌治

副会長 森成麟造

幹事 齋藤秀平

〃 岩澤良作

〃 石田善佐

〃 白銀賢瑞

〃 小松芳春

第一回配布

十二月廿八日 菅原神社古文書（三河守乳母祈念書状）カビネ写真版ヲ配布セリ 説明書ハ齋藤氏担任、半

紙謄写版ヲ附セリ

昭和二年度

第二回配布

昭和二年一月十日 森成長沼賢海氏ヲ診察シ暑中休暇ニ帰省時ヲ利用シテ一席ノ講演

³ このページは「趣意書」とあるのみで以下に内容は記載されていない。

⁴ ※個人名、住所は省略して掲載した。

ヲ依頼シ快諾ヲ得タリ
同時ニ同氏ヲ本会顧問ニ推薦シ承諾ヲ得タリ
演題ハ上越古代部落民族ノ分布ノ予定
月 日 三郷村大字池上出土（新道村字上稲田諏訪神社蔵）古鏡ヲポスト形コロタイプ版トシテ配布セリ 説明書ハ斎藤氏担任、ポスト形活版擦ヲ附シタリ猶ホ向後配布予定ハ大略次ノ如シ
菅原神社古文書 七枚
斐太村 丁字頭勾玉
西頸城方面土器
潟町銅鏃
美守村四頭雷斧
菅原村弥生式土器
石棒（金谷、菅原、美守、吉川、斐太）
石劔（高土、菅原、斐太）
金谷村中正善寺出土古鏡
碑石
保倉村子持勾玉
斐太村紡錘車
菅原村 〃
斐太村古鏡
明治村木葉土器
斐太村石皿其他
菅原村石皿其他
吉川石劔
〃 玦
西頸城能生谷 鶉石 縄文土器
四月 日 斎藤氏、森成ヲ訪問セラレ共ニ喜田博士ニ講演依頼状ヲ認メテ投函ス
月 日 喜田氏ヨリ快諾ノ返信来ル
日 大会ヲ五月八日希望ノ旨喜田氏に申送ル 同時ニ相馬仮会長ニ通知ス
月 日 喜田氏ヨリ同意ノ旨返信アリ演題ハ上越古代文化ノ発達ナリ
日 斎藤氏師範学校長ニ交渉シテ講供館ノ承諾ヲ得タリ
日 幹事会開催ノ必要アリ相馬仮会長ニ意見ヲ求メタルモ都合上不参、可然相談セラレタシト通信アリ

まず、「上越考古学会」の創立年は、これまで知られている「座談会」の記録に「大正14年（1925）」とされ、以降の『高田市史』など、すべてこの情報が引用されてきた。しかし

ながら、「日誌」では大正15年に創立したことになっている。創立の経緯としては、7月23日に喜田貞吉が来高、森成宅に泊りて斐太村、菅原村を視察したが、その際、斎藤秀平、岩澤良作、森成麟造の3名で考古学的知識向上のため時々会合することを約束したと書かれている。なお、この時の喜田の来高自体は、喜田貞吉『六十年の回顧』のなかで同様の記述があるが、こちらでは大正15年7月20日に菅原・斐太の古墳を視察したと書かれている。数日の違いはあるものの、この頃に喜田が上越を訪れたこと自体は、おおむねで間違いはないといえる。

一方、「座談会」の記録を見ると「…相馬御風さんが最初（大正十四年）の会長で、三年目から森成さんが会長になりました。…」と書かれている。この中で大正14年が括弧書きにされているのは、「三年目から森成さんが会長」という発言から逆算して、編集者が書き足したものだろうか。

いずれにせよ、「日誌」と「座談会」2つの記録を比較したとき、「座談会」は森成の没後に関係者の記憶に基づいて書かれたものであるのに対し、「日誌」は後日まとめて書いたものの可能性が高いという問題はあるものの、森成本人による記録である。喜田の来高がきっかけであること、それが大正15年であることを踏まえ、「上越考古学会」の創立は大正15年であったということをごここで唱えたい。

入会案内の送付先は、全部で84人である。うち、ちょうど半分にあたる42人から参加の申し出があったとされる。個人名と住所は省略したが、一部具体的な名前を上げると、考古学研究において森成らと関係の深い小松芳春や白銀賢瑞、江川直武、高田中学校時代に森成に考古学を教授した吉川純三郎や当時一緒に遺物採集をしていたという関口重内、池田珠美、考古資料収集家として知られる潟町村の大橋桂助や内藤善太郎、菅原村の梅澤徳治、美守村の富永孝太郎のほか、高田新聞社の石田善佐、柿崎銀行役員などを務めた三上廉平や高田市長の川合直次の名前もあった。なお、後述の「会員宛ての手紙（昭和2年12月）および収支決算書」（第4章③参照）では、大正15年度の会員数は37名、昭和2年度は63名となっている。

昭和2年1月には長沼賢海に講演の依頼をしたことが書かれている。長沼は明治16年高田の浄興寺山内の正光寺生まれで、大正14年に九州帝国大学法文学部国史学科初代教授に就任している。なお、確認できた限り、上越考古学会では同年5月に喜田貞吉、昭和5年5月には後藤守一（第4章④参照）を招いて講演会を実施しているほか、著名な研究者などに声をかけていたようである。

御風の会長就任の理由について関雅之氏は、会の創立が大正14年という前提のもと、同年秋に斎藤秀平や御風を中心に開催された「頸城地方考古展」の存在を指摘している（関2007）。「上越考古学会」が大正15年創立であったとしても、上越地方の考古学の研究会を組織するにあたって、相馬御風の存在は欠かせないものであったことに変わりはないだろう。ただし、「日誌」の中での相馬御風の立場は最後まで「仮会長」であった。そして、昭和2年5月9日の「高田新聞」によると、「上越考古学会総会」の場で御風は長沼賢海、川

合直次、喜田貞吉らとともに「顧問」に就任（会長が森成、副会長が斎藤秀平）したという。

「日誌」のなかで時期が分かるのは、4月□日（日は空白）に、森成、斎藤の2人で喜田貞吉に講演の依頼状を送ったということまでである。最後の記録は日付不明で、内容は、幹事会を開催する旨を御風に連絡したが、御風からは「都合がつかず参加できないので良いように相談して決めるように」と返答があった、とのことである。「日誌」に書かれた2か年（実質的には1年程度）のなかで、発起人の森成・斎藤・岩澤3名による会合を除くと、実際に幹事会などの会議を開いて話し合った内容の記録はなく、また、仮会長の御風も、発起人たちとの直接会合の機会はなかったようである⁵。高田と糸魚川という距離的問題があったためかもしれない。

4 「上越考古学会」の活動

本章では、「上越考古学会」の活動について森成家所蔵資料から考察する。以下、本章で紹介する資料も、今回森成家から借用、実見したものである。これまで会員に配布されていた写真などは、存在は知られていたものの、実際にどのような資料が配布されていたのか明らかになっていなかった。また、会員に送られた手紙は、会の活動状況の実態がうかがえるものであり、以下に掲載する。

①会員に配布した写真と解説文

会員の知識向上を図る目的で、森成が資料を撮影し、斎藤が解説文を付けて配布していたとされるものである。今回確認できた資料は全部で10種類あり、第1回から第4回までの配布資料は、写真の裏に配布時期がメモ書きされたものがあった。

【資料2】

第一回 大正十五年十一月二十六日

菅原神社古文書

第二回 大正十五年一月三十日

西松野木出土菊花双雀鏡

第三回 昭和二年九月二十六日

天神堂古墳群第九号墳出土大刀

第四回 昭和二年十二月二十一日

吉川村大字福平出土石棒

これらは「頒布品 森成所有」の記載と「上越考古学会 事務所 新潟縣高田市横町壱四番地」の印が押された封筒に収められている。

⁵ 森成と御風の関係について調査していく中で、糸魚川歴史民俗資料館（相馬御風記念館）所蔵資料を一部実見したが、森成から送られた年賀状が数枚あるのみで、上越考古学会に関する資料の存在は確認できなかった。

以下は配布時期不明で、「日誌」などとの突合もできないが、第5回目以降に配布されたものである。

明治村大字塔ヶ崎出土縄文土器深鉢

菅原古墳群第五十二号墳出土腸袂形鉄鏃

安塚村大字法定寺出土経筒、甕

関山村出土三頭石斧

美守村大字神田出土四頭石斧

関川村女川小学校敷地内出土翡翠垂飾

「日誌」では最初の資料写真・解説（菅原神社古文書）の配布が大正15年12月となっているが、写真の裏の書き込みと日付が異なる。

②会員宛ての手紙（昭和2年12月）および収支決算書

謄写版印刷されたものである。こちらも森成本人の筆跡と思われる。会員に配布するため印刷したものの残部であろう。内容は以下のとおり。

【資料3】

拝啓

向寒の砌益々御清栄奉賀候

陳者当上越考古学会事業進行に関しては毎度御後援を賜り一段の進行を見申候

今回左記諸点の改正並に御報告申上候間宜敷

御高慮の程願上候

一、年度改正に関する件

従来学年度を以って当会年度と致し居り候も便宜上来る

一月より年度を改正致し昭和三年一月より昭和三年十二月末

日迄を昭和三年度と致し度右御諒知願上候

一、決算に関する件

同封候通り右年度改正に伴い昭和二年度決算報告書をも封入致し置き候間御一覧の上御承認願上候

一、会費未納に関する件

昭和元年度、昭和二年度当会費未納の各位は此の際至急御振込下され度（帳簿整理上、会務の進行上困却致し居り）候

時節柄各位の御健康を祈上候

昭和二年十二月

上越考古学会

殿

◎収支明細書

・収入之部

大正十五年度

一金 参拾参円也 会費三十三名分 未納者四名

一金 五円四拾銭也 写真原板料二組齋藤秀平寄付

昭和貳年度

一金 四拾円也 会費四十名分未納者二十三名

一金 貳円七拾銭也 写真原板料一組齋藤秀平寄付

一金 貳円七拾銭也 全 森成麟造寄付

総計 八拾参円八拾銭也

・支出之部

大正十五年度

一金 六円也 創立費

一金 五円拾五銭也 備品費

一金 八円参拾八銭也 諸雑費

一金 参円四拾銭也 通信費

一金 五円四拾銭也 写真原板料

一金 貳拾壹円参拾四銭也 頒布費

総計四拾九円六拾七銭也

昭和貳年度

一金 五円四拾銭也 写真原板料

一金 貳拾貳円也 頒布費

総計 貳拾七円四拾銭也

◎總會並発会式経費決算表

昭和二年五月六日

総支出金 百四十九円五拾五銭也

総収入金 百四拾九円五拾五銭也

内

百三十三円五十五銭也 森成麟造寄附

拾円 中頸城郡教育会寄附

五円 齋藤秀平寄附

壹円 岩沢良作寄附

以上

この手紙と収支決算書は、昭和2年12月に会員宛てに送付されたものとみられる。

通常は4月から翌年3月までの学年度を年度とするところ、意図は不明であるが、「便宜上」、1月から12月までを1年度とすることに改正したという。この改正は昭和3年1月1日より採用されることとなっているが、先述の「日誌」では、すでに昭和2年度から1月はじまりの月日を記載している。このことから、「日誌」はやはり昭和3年以降にまとめて書かれたものである可能性が高いといえるだろう。

次に、収支決算書のみをみる。こちらは、会の創立初年度にあたる大正15年（昭和元年）度と、昭和2年度の収支決算である。収入は、1人年間1円の会費および森成ら主要メンバーの寄付金を主なものとしている。支出は写真原板料や頒布費などであるが、初年度の備品購入や勧誘状の送付などに要した経費は、収入に対して12円27銭の超過、翌年度の収入を充てて黒字決算としている。

会員数は初年度が37名に対し、2年度は63名と倍近くに増加しているが、会費未納者も初年度4名に対し、2年度は23名に増えている。未納の理由は不明だが、森成ら主要メンバーがいた一方、会への参加を申し込んだとはいえ、それほど関心の高くない会員がいたような構造が推測される。

さらに、昭和2年5月に開催した「総会並発会式」では、総支出金149円55銭のうちほぼ9割にあたる133円55銭を森成が寄付している。会の活動自体もさることながら、費用面でもかなりの部分を森成に依存していたようである。

なお、昭和13年（1928）に新潟県郷土博物館で開催された「中部考古学会第二回大会」のなかで、斎藤秀平による「上越考古学会の経費は森成氏一人でやっていた」という旨の発言が記録されている⁶。こうしたことから、会費の徴収が次第に行われなくなっていた様子がうかがえる。

③会員宛ての手紙（昭和4年1月）

②と同じく謄写版印刷されたものである。ただし、筆跡は森成本人と思われる「日誌」、や②とは異なる。内容は以下のとおり。

【資料4】

拝啓 時下厳冬之候 貴名には益々御健勝之由大慶至極に存じ候

さて先年度に於ける我が上越考古学会の活動は種々多忙のため其歩遅々として尾大振はざるの感有之候は各位に深く御わび申上ぐる次第に御座候

実は先般内務省荻野仲太郎氏の御来越を機として一場の御講演を御依頼申し大いに我が上越考古学会の為に氣勢をあげ度夫々手筈致し置き処種々の都合上其機会を逸しは誠に遺憾千萬に御座候 何れまた来る可き折をみて是非実現為し度考へに候

次に各位に御配布申上ぐ可き品は（先年分）二回分を取纏め差出しにつき右御了承下され度候 今や已に昭和四年度に入り申候 今年は 先年の戦跡に鑑み周密なる計画

⁶ 中部考古学会の大会資料については、中部考古学会[編]『中部考古学会彙報全 長野県考古学会創立20周年記念復刻』（長野県考古学会、1980年）を参照した。

の下に萬遺漏なきやう事業取運び度候へば各位にも甚大の御活躍振り御發揮下され度候 然して我が上越考古学会の為め有終の美を収め得らるやう是非冀望仕り候
先は御挨拶迄

敬具

昭和四年一月 日

上越考古学会長 森成麟造
殿

昭和3年度に配布予定であった資料2回分を、このときまとめて配布したという。講演会を計画していた「荻野仲太郎」は、明治3年三重県生まれで、国宝保存会委員、重要美術品等調査委員会委員、史蹟名勝天然紀念物調査委員会委員などを歴任した荻野仲三郎のことであろうか。資料配布や講演会が実施できなかったことなど、このころから徐々に会の活動にも滞りが出始めていたことがうかがえる。

④上越考古学会講演会案内（葉書）

昭和5年の上越考古学会講演会案内の葉書である。内容は以下のとおり。

【資料5】

謹啓新緑の候に御座候處尊堂愈々御清適之段奉大賀候
陳者本会創立第五週年に相当り候に就き左記の通り紀念講演会開催仕り候間御多用の折柄とは存じ候得共斯学奨励の為め多数御勧誘の上萬障御繰合御来聴の榮を得度此段御案内申上候 敬具
期日 五月二十五日午後二時
場所 高田師範学校講堂
講師 東京帝室博物館歴史部長 後藤守一氏
演題 未定
上越考古学会
昭和五年五月二十一日
会長 森成麟造

講演会の講師であった後藤守一はこのとき、「上越考古学会」による宮口古墳群の発掘調査の現地視察のほか、潟町や糸魚川（長者ヶ原遺跡）など頸城の遺跡を視察して周り、帰京後には「上古時代に於ける上越地方一（一）」（『考古学雑誌』第20巻第9号、1930年）を発表している。

⑤森成麟造宛て喜田貞吉書簡（昭和4年12月□日消印 ※日付不明）

喜田貞吉から森成に宛てた書簡。内容は以下のとおり。

【資料6】

拝啓、相変らず御多祥の御様子奉慶賀候、
 扱過般は遺物写真版およびこまごまなお手紙拝見ありがとうございました、
 小松氏からも其後度々通信有之、
 同君の熱心には敬服致し居り候、
 斎藤氏どこかへ転仕の噂、
 同君の為には慶祝すべき事ながら貴意の如くどうか上越方面通をとめて置く様致した
 きものに候、
 （中略）
 上越考古会も一度二三日つづきに仲間がよりあひ、
 日に四五時間夜方にでも集まつて、
 考古学の根本要議を養成してはいかが、
 斎藤、小松、白銀等諸君によろしく

「上越考古会⁷」について述べられている部分が末尾のみであることから中略した。全文は上越市立歴史博物館令和4年度企画展パンフレットに掲載しているもので、そちらを参照されたい。喜田は森成との書簡や、自身の日記ともいえる「東北文化研究」のなかでたびたび「上越考古会」のことについて触れている。森成所蔵の資料を視察した考古学者は数多くいるが、今回実見した森成家の書簡を見る限り、森成自身の考古学的活動（研究）にまで言及しているのは、喜田のみであった。

この書簡の中で喜田は「一度二三日つづきに仲間がよりあひ、日に四五時間夜方にでも集まつて、考古学の根本要議を養成してはいかが」と述べている。ここでの「考古学の根本要議」が、層位学や型式学といった考古学の基礎的知識のことを指すのか、あるいは考古学研究の意義や目的のことを指すのかなど、具体的な意図は不明であるが、いずれにせよ会の活動がより高い水準となることを願っていたものと思われる。

なお、こうした「根本要議」を養成する寄合いのほか、会員たちが集まって各自の研究発表をするような機会があったのかは定かではない。むしろ会員宛の手紙や「日誌」の中に全く表れないことから、少なくとも昭和4年までの間に開催された可能性は低い。

おわりに

「上越考古学会」の活動として、森成家所蔵資料をもとに新たに明らかにした内容をまとめると、以下のとおりである。

- ・会の創立年は、従来言われていた大正14年ではなく、大正15年であった。

⁷ 喜田は「東北文化研究」などのなかで「上越考古会」と記載しており、今回紹介した書簡でも同様である。関雅之氏は「往時の地方の考古学会名は、学の字を入れず〇〇考古会としたものがみられ、喜田博士の誤記である」としている（関2007）。

- ・初代会長であった相馬御風は「仮会長」であり、大正2年5月に森成に会長が交代して以降は、顧問に就任している。
- ・年に数回、遺物の写真と解説文のセットを会員に配布していた。配布資料は、「明治村 大字塔ヶ崎出土縄文土器深鉢」、「菅原古墳群第五十二号墳出土腸挾形鉄鏃」などであった。
- ・森成ら主要メンバーを中心に会の活動が行われていた一方、会費未納者も一定数おり、会員によって関心の高さに差があったと思われる。
- ・斎藤秀平の小千谷高等女学校転任（昭和7年）をきっかけに会は自然消滅したとされていたが、それ以前の昭和3年ごろから会の活動には滞りが出始めていた。

森成麟造と上越考古学会の関わりについても、今回明らかになったことは少なくない。本稿で紹介してきたように、「上越考古学会」の活動は、金銭面はさることながら、講師との日程調整や会員への資料配布に至るまで、実務的な部分でも森成に大きく依存していた様子が見えてくる。本職である医業の傍らで多種多様な文化活動の中心にいた森成は、多忙を極めていたことは想像に難くない。

また、「上越考古学会」は、会員同士の研究会開催や研究誌の発行などが行われていた形跡はない。そういった意味では、現代の感覚からすると、「上越考古会」という名称の方がより実態を表しているといえるかもしれない。ただし、会員相互の知識向上を目的とした資料写真の配布や古墳など遺跡の発掘調査、著名な研究者を招いての講演会の開催、またそれらが新聞などで広く紹介されることで、会員のみに限らず地域の人々全体に、地元の歴史・考古学への関心を高める一助となったことであろう。

参考文献

- ・伊東信雄[編]『喜田貞吉著作集 第14巻 六十年の回顧・日誌』（平凡社、1982年）
- ・上越市史編さん委員会[編]『上越市史 資料編2 考古』（上越市、2003年）
- ・関雅之「高田新聞からみた上越地方の考古学」新潟県考古学会[編]『新潟考古』第10号（新潟県考古学会、1999年）
- ・関雅之「新潟県考古学研究の歩み」新潟県考古学会[編]『新潟県の考古学』（高志書院、1999年）
- ・関雅之「上越考古学会と初代会長の相馬御風」上越郷土研究会[編]『頸城文化』第55号（上越郷土研究会、2007年）
- ・高田市史編さん委員会[編]『高田市史』第3巻（上越市、1980年）
- ・中部考古学会[編]『中部考古学会彙報全 長野県考古学会創立20周年記念復刻』（長野県考古学会、1980年）